



つちおと



三条市立裏館小学校 学校だより NO.13



(槌音)



令和2年3月19日

裏小の3月：新型コロナウイルス感染症対策で3/3（火）から休校中

新型コロナウイルス感染症対策により、全国の学校では3月の下旬（裏館小は3日）から臨時休業を余儀なくされました。裏館小学校の皆様には、学区にある郵便局員の発症という状況を抱えつつも、状況を冷静に受け止めていただき、柔軟に適切に対応していただきました。各家庭の子どもたちのケアはもちろんのこと、休校に伴う連絡や三条市としての取組の推進を柔軟に受け止めていただき、心から感謝申し上げます。

休校中、家庭で監護が難しいという子どもさんを学校で受け入れました。多いときで約40人、今は、低中学年を中心にして30人前後で過ごしているところです。



【児童玄関で確認をして、教室へ行きます。相互に間隔を取り、自分の計画にそって学習や読書を進めています。トラブルもなく、上手に過ごしています。】



【低学年や中学年でまとまって教室を利用しています。上手に時間を過ごしています。休校後半の休憩時には、体を動かしてリフレッシュしました。】

「学校経営に詳しい 上越教育大学 赤坂真二教授 のコメント」

小学校に約20年間勤め、学校経営に詳しい上越教育大学の赤坂真二教授は、この時期を「学習のまとめをするとともに、成長を振り返り、進級・進学に向けた意欲を育むための大事な時期」と言っています。そんな日々が断ち切られた動揺を推しはかりつつ、「保護者は、子どもの様子に気になることがあったら遠慮なく学校に連絡を」と新聞で助言していました。まさしくその通りです。

今のところ各ご家庭の配慮と学校職員の対応で、スムーズに休校中のそれぞれの生活が流れています。三条市校長会でも確認いたしました。学習の終わらなかった単元やその内容については、4月になって、新年度がスタートしたら、授業の中で指導します。各自で自主的に進めていた部分もあると思いますが、全体で確認しつつ、適切に学びの場を設ける予定です。ご心配なくお願いいたします。「やっていなかったから、分からなかった～」にならないように進めていきます。

学校再開の動きに向けて、赤坂教授は「まずは再会の喜びを伝え、身体的な健康チェックにとどまらず、心理的な不安を軽減させることが大切。相談したいことがある児童には、個別に話を聞く時間をつくってほしい。」と求めています。裏小でも個々を大切にして、指導を再開する予定です。



休校中の子どものケア・守り方：親がまず落ち着いて 安心させて

朝日新聞「休校の影響で困っていること・心配なこと」（「NPO法人フローレンス アンケート調査」から）

- ① 子どもが運動不足になること 69.9%
- ② 休校自体や友達と会えないことによるストレス、心のケア 56.8%
- ③ 学習に遅れが出ること 56.8%
- ④ 子どもの日中の居場所・遊び場がないこと 50.6%
- ⑤ 給食の提供がないこと 46.6%
- ⑥ 対応のために支出が増えること 46.4%
- ⑦ 家事や育児の負担が増えること 46.1%
- ⑧ 生活環境が変わることによる自身のストレス 35.5%



「外での運動 文科省「OK」

東北地方の40代の女性は、休校後子どもの小学校から「公園で遊ばせるのを控えて」という内容のメールを受け取った。「子どもが遊んでいるのが不安だ」との苦情が学校にあったからだという。子どもには宿題や作業をさせて過ごさせているが「感染者が少ない地域なのに…」と戸惑う。

文科省は、3/9 休校中の過ごし方について、風邪の症状がないなどを前提に「屋外での運動や散歩を妨げない」という見解を示した。当初「基本的に自宅で過ごすように指導を」としていたところ「公園に行ってもよいのか」などの問い合わせが相次いだためという。担当者は「もともと散歩や公園に行くことを制限しているつもりはなかった」と説明。運動不足やストレスを解消することも大切として、「ジョギングや縄跳び、校庭・体育館の開放を否定しない」ことも明示した。

子どもの心身の状態を心配する親も多い。病児保育も取り組む認定NPO法人フローレンスが保護者に、休校で困っていることや心配していることを尋ねたところ、運動不足やストレスなど子どもへの影響を挙げる声が多かった …。

「学ぶ権利 奪われる可能性」

感染症不安の中、子どもたちの育ちや学びが軽視されているのでは…。国際NGO「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」は、6日緊急声明を出した。国は休校対策として家で自習させることを各学校に求め、ウェブで教材や自宅学習サイトを紹介する。しかし声明は「『自宅で勉強できる環境にない』『インターネットにつながるパソコンがない』という子どもも存在し、学習に必要な資源に不平等が生じる可能性が極めて高い」と指摘。また、子どもや家庭への影響の調査や、経済的な事情で学校をやめる子が出ないように施策の弾力的な運用も要望している。声明をまとめた田代光恵さんは「感染対策とのバランスが難しいが、学校が果たしていた機能がなくなることで、特に弱い立場の子らへの直接的なケアが途切れ、学び・育つ権利が奪われることを心配している」と話す。

これらを受けて、前に述べた赤坂真二教授のコメントがあり、大人へのアドバイスとして「セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン」が次のように述べていた。



【大人は～】

- ◇このような反応や行動は自然なことと知り、できるだけいつもの日課や習慣を保てるようにサポートせよ。
- ◇子どもに変わった様子がないか、体調が悪そうな子はいないか、いつもより丁寧に見る。
- ◇様子が気になる子の声に耳を傾ける。落ち着いて話せる環境をつくり、子どもが自ら話すことを聞く。

以上が新聞記事に掲載されていた記事中心のものでした。他にも

「あせらずに、子どもの重症化は『まれ』であることを理解して、安心せよ。」

「手洗いを習慣にして、インフルエンザなどほかの感染症も防ぐことに役立つと受け止めよ。」

と川崎医科大学教授の中野貴司教授がコメントしていました。「このウィルスは、分かっていないことが多い。だからこそ不安になるのだが、子どもは親の不安を敏感に察知する。今、分かっている中では、感染した子どもで症状が重くなったり、もともとっていた病気が重くなったりした人は、世界中でもすごく少ないのだ。」と正確に伝えて、安心させてほしいと強調していました。

親は、教師は、子どもたちのためにこそ「冷静に、落ち着いて、行動していくべき」なのです。

【つちおと：文責 裏館小学校長 小林徹哉（※3/17のN013は、朝日新聞の記事をいくつか参考にしました。）】

【離任式は実施しません。最後の「つちおとN014」は3/25発行です。HPのみの掲載。卒業式と離任者の挨拶中心です。】